

いたて便り Vol.5

土から復興を考える



しょうじ まさのこ
庄司正彦さん

しず はらせいいち
鳴原誠一さん

しょうじ きいち
庄司喜一さん

※手に持っている野菜は、
実証事業で栽培された
ほうれん草、小松菜です。

7月キュウリ。10月レタス。
11月は、ほうれん草、小松菜を収穫しました。

飯舘村長泥地区では、除染した土の活用に向けた
実証事業の一環として今年から野菜も栽培しています。
土づくりから関わっていただいている、

地元の庄司喜一さんにお話を伺いました。

「新しい土や堆肥を使うことは、
実証事業以外にはありませんでしたから、
そこは初めてのことで苦労しています。
ただ、いろいろ試してみても、私たち自身が

経験を積むことも実証事業だと考えています」

「放射能濃度を測った結果から、
作物に影響がないことを私たちは知っていますが、
他のみなさんがどのように
お考えになるかは気になります」

環境省では再生利用実証事業を通して

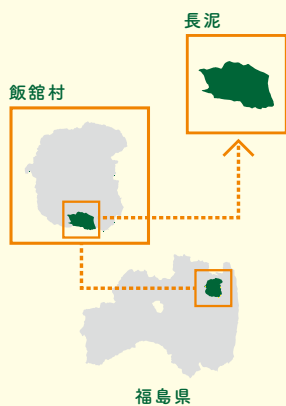
農作物中に含まれる放射能濃度を測定しています。

引き続き、科学的なデータを取得するとともに、

情報発信に努めています。

※これまで測定した野菜の放射性セシウム濃度は
0.1〜2.3 Bq/kgでした。(一般食品の基準は、100 Bq/kg。
なお、これらの野菜は、測定後に廃棄しています。)

また空間線量率、水、大気の測定のみならず、
外部被ばく線量も継続的に把握し、
実証事業に関わる人々の安全に常に配慮しています。



実証事業の
詳細はこちら



福島、その先の環境へ。

風評被害と向き合い、震災を風化させることなく、福島のよりよい環境づくりに貢献すること。そのために環境省は、「飯舘村での実証事業」、「いっしょに考える『福島、その先の環境へ。』チャレンジアワード」など、福島の「その先」に向けた取組を行っています。

「までいの村」から。

「までい」は、「手間暇惜しまず」「丁寧に」「心を込めて」という飯舘の方言です。

いたて便り Vol.6

土から復興を考える



しぎはらきよみ
鳴原清三さん

花を育てることは、
土を作ること、水を選ぶこと。

鳴原清三さんは、

震災前は長泥で花を栽培する仕事をされていました。

今も長泥で環境再生事業の一環として、

トルコギキョウやカスミソウ、ストックを育てています。

「まずは土作りをやらなといけない。

土がよければ背丈も茎も立派に育つ。

これからもっと良い花を作りたい」

清三さんはそう話してくれました。

もう一つ大切なものは水。

「使っている水は震災前に50メートル掘った

自分の家の井戸から引いてきている。沢の水の放射線量も低いし、

安全な水じゃなければ花の栽培なんてできないからね」

清三さんは10人くらいの仲間と、

環境再生事業で栽培している花や野菜の手入れをしています。

「長泥を思いながら触れ合う場所が大切」

という言葉を実践する清三さんです。

環境省では環境再生事業を通して

農作物中に含まれる放射能濃度を測定しています。

引き続き、科学的なデータを取得するとともに、

情報発信に努めてまいります。

空間線量率、水、大気の測定のみならず、外部被ばく線量も継続的に把握し、

環境再生事業に関わる人々の安全に常に配慮しています。

※飯舘村長泥地区の環境再生事業では、村内の除染で出た除去土壌のうち放射能濃度の低いものを

再生資材化し農地のかさ上げ材として利用します。

またその上に放射線を遮るための土をかぶせ営農しやすい農地を造成します。

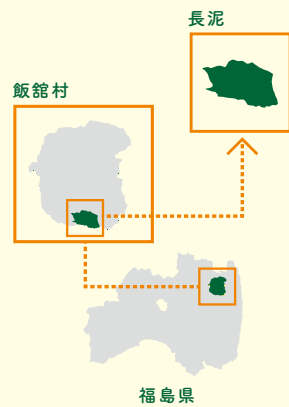
長泥地区で地元の皆様に大切に育てていただいた花は、

国際会議・イベントや、環境大臣の記者会見などの場での活用、

環境省の情報発信施設での展示を行っています。



国際会議の場での活用



福島県

環境再生事業の
詳細はこちら



福島、その先の環境へ。

風評被害と向き合い、震災を風化させることなく、福島県のよりよい環境づくりに貢献すること。そのために環境省は、「飯舘村での環境再生事業」、「いっしょに考える『福島、その先の環境へ。』チャレンジアワード」など、福島県の「その先」に向けた取組を行っています。